

卷三「下鴨」



京都府立総合資料館蔵

【原文】

下鴨

当社たうしやの御事みぎは。上うへにてあらはし侍まをることく御祖みその
 神かみと申奉まをる。玉たまよりひめ是也こゝろ。かの丹塗にぬりの矢やに
 鴨かの羽はあれは。此所こゝろを鴨かといふなるとぞ。爰こゝは又た
 末十日すゑのうちには人のまうでもつねよりをびたし
 く侍まをるなり。あしにかゆるたんごもおかし
 みたらしやけにも花はなよりたんご哉や（十五ウ）

当社の御事は。上にてあらはし侍ることく御祖の
 神と申奉る。玉よりひめ是也。かの丹塗の矢に
 鴨の羽あれは。此所を鴨といふなるとぞ。爰は又た
 すと申す也。神前に御たらしあり。毎年水無月
 末十日のうちは人のまうでもつねよりをびたし
 く侍るなり。あしにかゆるたんごもおかし
 みたらしやけにも花よりたんご哉（十五ウ）

【校訂本文】

下鴨しもがも

当社の御事は、上にて著し侍ることく、御祖みおやの神と申し奉る。玉依姫たまよりひめこれなり。かの丹塗の矢に鴨の羽はあれば、この所を鴨かもと言ふなるとぞ。ここはまた、糺ただす(注1)と申すなり。神前に御手洗みたらし(注2)あり。毎年水無月末十日のうち、人の詣でも、つねよりをびたゞしく侍るなり。あし(注3)にかゆる団子(注4)もをかし。

御手洗やげにも花より団子かな

【注】

- (1) 下鴨神社の南には、糺森が広がっていた。納涼の地としても知られ、江戸時代には茶店が設けられ人々でにぎわった。
- (2) 神を拝む前に、参拝者が手を清め口をすすぐための場所を「御手洗」というが、下鴨神社の境内、糺森ただすのもりの中には御手洗川という小川が流れている。かつては、六月十九日もしくは二十日から晦日まで、御手洗川に足をひたして無病息災を祈る、御手洗会みたらしえという神事があって、多くの人々が参詣しにぎわった。御手洗参り、御手洗詣みたらしもでもとも称する。
- (3) 女性語で、「金銭」のことを丁寧た丁寧に「おあし」と称する。
- (4) 竹串に米粉でつくった数個の団子を刺し、砂糖醬油さとうじょうゆ餡あんをからめたもの。江戸時代初期から、下鴨神社境内の茶店で売られていた。

【現代語訳】

下鴨

この神社のことは、以上に書き著しましたように、御祖の神と申し上げます。玉依姫が、まさにこの神様です。例の赤く塗った矢に、鴨の矢羽がありました。それで、ここを鴨と呼ぶのだと伝えられています。ここはまた、糺と申します。神様の祭られている所の前に、御手洗川があります。毎年、六月の末の十日間は、（無病息災を祈って御手洗川に足をひたす御手洗会があるので）参詣客も、いつもより随分多くなるのでございます。足ならぬ「あし」（お金を）出して団子にかえているのも、面白おかしいものです。

御手洗会に参詣して御手洗川に足をひたしている人がいる一方、

「おあし」（お金）で御手洗団子を買う人もいる。なるほど「花より団子」というとおりだな。

（赤瀬信吾）